

『神統記』におけるゲー

—モイラ概念を通しての考察—

序 「万物の母なるゲー」[ἡ Πανταύχμητρος]⁽¹⁾

本稿は、ヘーシオドスの『神統記』におけるゲー（大地）⁽²⁾の特異なほどの強大さを、モイラという概念を用いて論述するものである。その際、『神統記』をテキストとし、その二つの柱、創世神話と継承神話におけるゲーの振る舞いをモイラの視点から分析することで、説明を試みた。

『神統記』は字義通りギリシア神話の神々の系譜を記したもので、最終的にはオリュンポス神族のゼウスが覇権を確立するまでを描いており、このことから所謂ギリシア神話の主神は大神ゼウスとされている。しかし『神統記』を貫く三つの継承神話において、ゲーはその全体を見渡せる唯一の立場に居り、実はこの継承は三代の支配神たち自身

櫛野真理

ではなくゲーによって仕組まれている。ゲーは世界を直接支配する神々の王ではないが、その王を選ぶ者、その時々⁽³⁾の権力体制を仕立てる存在 Kingmaker なのであって、ゲーこそが最も主体的に世界の王権交代を仕組み、神族間の世代交代の立役者であるという読みが可能である。この観点を持ちつつ本論を進める。

また、ゲーは「全てのものの母」、「存在の中で最も古い者」⁽⁴⁾であり、生むことでこの世界を形作ったと謡われている。よって、こうした陰からの支配や、また当然そうすべき権限をゲーははじめから持っているのだとも理解できる。ゲーは生むという行為を完全に掌握し、それを自由にできる⁽⁵⁾万物の母である。

一 モイラ概念

さて本稿では「モイラ」という概念が重要な術語となっている。モイラとは運命の女神のことも指すが、同時に古代ギリシア世界観においては人間社会、神界をも包含した⁽⁶⁾世界全体を貫徹する運命・摂理である。本稿では前者の、運命の糸を紡ぎ測り切り落とす具体的な女神というよりも、後者の宇宙全体を包括する摂理、即ち抽象概念としてのモイラをより重点的に扱う。

まずモイラとは動詞 *Meiponai* (分与する) から派生し、原義は「分けられたもの、分、分け前、分け与えられた役割」⁽⁷⁾などである。創世神話からも分るように神々は、世界という存在そのものに関わっているので、神々には世界的な基本的な構成要素が配分されていると考えられる。たとえば「神統記」九〇一行以下、ゼウスがテミスと結婚してホーライたちが生まれるまでは、この世界には正義や秩序も存在していなかったとされる⁽⁸⁾。このようにモイラは、神々においては「領分、職域、職能、機能、神格、属性、司るもの」などと定義できるだろう。個々の神々それぞれ自身がこの世界の重要な構成要素であり、宇宙を形作るモザイ

クの一片のようなもので、一つ欠けても世界の安定維持は不可能となる。世界存立に必要なもの一つ一つが神々一人一人に担われており、アプロディーテーが美と愛の女神であるように個別の神が各自、領域を司っているとも了解できよう。

ゲーを特徴づける最重要の職能モイラこそ、他ならぬ生むということであり、換言すれば、この生む行為によってこの女神の様々な行動や特性が説明できると考えられる。そこでゲーの特徴を明らかにするのにモイラという語が有用であり、モイラを使うと、先述のゲーの特質はより明解になる。即ち生むという行為を完全に掌握し、それを自由にできることは、ゲーは生むというモイラを持っている、と表現することができる。このモイラを概念装置として用いて、テクスト『神統記』にあたり、そこでのゲーの特性の分析を試み、冒頭に触れた『神統記』におけるゲーの強大さについて論述する。

二 ゲーの持つ二つの属性

『神統記』におけるゲーの扱いは物質と人格の二つの側

面を持っており、それは即ち、ゲー自身が大地そのもの・世界の土台・様々な生命が生きる「場」であるということと、あらゆる事物を生む母神であるということである。つまり、大地ゲーは字義通りに物質的な大地そのものであると同時に、人格的な大地女神でもある。⁽¹⁰⁾ よって、ゲーの属性は次の二つに大別できる。以下、空間的な「場」であるということ、次に生むという意志を持った人格神であるということ、この二つの視点から説明する。

第一にゲーの「場」であるという性質は、ギリシア語の *γῆ* は大地女神とともに大地それ自体を指す一般名詞であることから理解できる。ゲーについて、一一八行では「永遠に揺るぎない住処 *εὖρος ἀφ'αὐτῆς γαίης*」と表現されており、よく見られるエピテトンも「胸幅広き大地」*εὐπορτός* (一一七行)⁽¹²⁾ である。つまりゲーの名の第一義は、大地そのもの、世界を支える土台であるということが、これらの表現からさらに分るだろう。ゲーはそもそも、森羅万象が住まう確固たる大地である。

一二九〜三二行は基盤の大地たるゲーが自ら分裂して、空や山や海となり、神々やニンフのために彼らの住居となる世界を整えてやる場面である。この後に巨人や怪物たち、

人間たちも生まれるが、あらゆる種族が生きるこの世界が脆弱なものであってはならず、不死なる神々の住み処は同じく「永遠に揺るぎない」ものでなくてはならない。このようにゲーは、そもそもがあらゆる生命体を包み込む広大な大地であり、そこに様々な種族が生息する舞台、世界そのものであって、場・空間としての面を持つといえる。

第二にゲーの生むという女神としての人格、即ちゲーの持つモイラは、主に『神統記』における二つの主要な柱、創世神話と継承神話を通してのゲーの分析により明らかになる。先述のようにゲーは原初から存在し、大地そのものでありながら、生むという重要な行為を繰り返す行方一柱の女神である。大地はただ確固たる不動の空間としてそこにあるだけではなく、女神として明確な意思を持ち、自ら分裂して世界の基本構造を構築し、また同時に夫自身をも生んで(一二六〜八行)、さらにはこの夫とともにティーン神族や巨人たちなどあらゆる神々を生んでいる。

ここで注目すべきは、この夫をも生み出すというゲーの特異な生成の一過程である。ゲーにとつて子供は同時に夫であり、この子供即ち夫の離反によって政權交代は起こり、創世神話から継承神話へと繋がる。「万物の母なるゲー」⁽¹³⁾

Mymp [Mauru] は創世の折に万物を生み出しただけに留まらず、後のこのような神族の世代交代をも画策し、大地が支配者を選ぶという、この女神の影響力の大きさがヘーシオドスのゲー重視へと繋がるのだと理解できよう。次節はゲーの、夫をも生み出すという特異性に注目しつつ、生むというモイラから創世神話を分析する。

三 世界創造神話

ゲーは原初から存在したといわれている。カオスの次に生まれたとされ(一一六〜七行)、以降『神統記』ではカオスにはない、明確な意思を持った存在として描かれている。⁽¹⁴⁾『神統記』の世界創造において最初に挙げられる根源はカオスであるが、生むという意図を持って意識的に創造を行ったのは、ゲーが最初である。このようにゲーは生まれるのではなく生むという意図的な創造をはじめて行い、⁽¹⁵⁾仮にギリシア神話において創造主に近いものを挙げるとするとこのゲーとなるのではなからうか。世界は何ら意図もない生成によりなっただけではなく、女神によって出産された。この意図的創造、生むというモイラがゲーを、後のオリュンポスの神々、ひいてはその主神たる全知全能のゼウ

スでさえも逆らえない強大な影響力を持つ女神としている。一二九〜三一行を見ると、ここでゲーは天や山や海を無性生殖で創造して、神々やニンフのために彼らの住居となる世界を整えている。そして一三三行以下、息子である天ウーラノスとともに天地を形作り、彼と共寝して、即ち有性生殖で、この後オリュンポス神族の先代に当るティターン神族や一眼巨人・百腕巨人などを生んでいる。

この生殖方法の違いは次に二つに分けて詳述するが、ここで再び確認すべきは、『神統記』におけるゲーには明らかに世界と、その構成員を生もうという意図が窺えるということである。ゲーはあたかも、母として子供たちを生む前に彼らの寝床を整えてやっているように、たった一人で世界の構造を組み立てているといえる。

無性生殖

さて、この創世神話において、ゲーの生殖の方法は二つに分けられる。不毛の海ポントスを生むまでは、ゲーは独りで生殖を行っており、これは換言すれば分裂である。⁽¹⁶⁾一二六行以降もやはり、「自身と同じ大きさの」天や山、海を生み出したように、自らを分裂・変化させて世界の構造、

同じ大地の延長としての地形を作っている。世界の枠組みを整備している生成の初期段階では、大地ゲーは無性生殖を行っているといえるだろう。

また同様に無性生殖で、鋼を生み出していること（一六一行）は興味深い。第一の世代交代においては、ゲーは夫である最初の支配者ウーラノスを廃そうと計略を巡らし、子供たちに彼を討つように命じるが（一五九〜六二行）、ここでゲーはウーラノスの陰部を切るという目的のために鋼鉄（*ōdaktus*）という存在そのもの（*phōs*）⁽¹⁷⁾を創造している（一六一行）。どちらの例からも無性生殖は、特異な方法であっても明確な意図を持った出産であることが分るだろう。ゲーはこのように自らの生む力を世代交代の際の策略に振るうことが多いが、これは次節継承神話と絡めて論じる必要があるだろう。

有性生殖

全てを生み出す母神であるゲーは、自分の夫までも自ら生み出し、無性生殖で生み出したこの夫との間で有性生殖を行う。最初の夫ウーラノスはゲーから生まれ（一二七行）、彼は「添い寝して *enuphōrion*」ゲーと交わった。自分

の配偶者となる息子を生むということは即ち子が夫でもあり、換言すれば母と子の結婚⁽¹⁸⁾である。

自己分裂の無性生殖の時には起こらなかった不具合が、この有性生殖の際には起こる。それは、両者の意思の不一致である。有性生殖はたとえ相手が自分の子供であっても、別人格を持つ他者を介さなくてはならず、実はこの夫婦間もしくは親子間の対立こそが、世界の変革を起こすと解釈できよう。世界を生んだゲーの夫の男神とは、いふなれば神々の王・世界の支配者であるが、王は己が治世を存続させようと篡奪を恐れるあまりに、次代の王となる可能性のある自らの子供たちを再び闇に押し込んで、子の誕生を阻害し、子供が生まれた事実それ自体を消し去ろうという道理に反した行動をとる。一方ゲーは生むというモイラを持ち、その行為が正しく行われるように見守る女神であるから、このような王の行為はゲーのモイラに抵触する。その結果ゲーは多くの場合篡奪者の側に立ち、ゲーにより計略を授けられた新世代の支配権篡奪者によって王は追放され、世界を支配する神の王位継承、世界変革が完了する。よって、この女神を世界の刷新者とも見ることも妥当であるように思われる。このように、他者存在として、息子であり夫

であり神々の王である者を生み出すゲーの有性生殖は、継承神話を形成する要となるのである。次節では、続けてゲーの生むというモイラから継承神話を分析し、母なる大地女神ゲーの性質を考察したい。

四 継承神話

生むモイラから導かれたゲーの強大さが具体的にはどのように『神統記』に表れているか、この項では継承神話の構造を分析し、それを確認した上で次節以降、テクストの個別な箇所を参照しながら見ていく。『神統記』の主題の一つでもある継承神話は、宇宙神ウーラノス↓巨人神クロノス↓オリュンポス神族ゼウスの三世代にわたる世界支配の移行を語っている。先述の通り、その際にはゲーの思惑が密かに、またある時は公然と重要な役割を果たしている。たとえば息子に取って代わられるとの現支配神に対する警告や、ウーラノスへの去勢(一七八〜九五行)や、クロノスからのゼウス救出(四五九〜六二行)、ゼウスに対抗するテュポエウスの創造(八二二〜六八行)、などが挙げられるだろう。

継承神話は有性生殖の部分で触れたように、以下の如く

展開する。まず王権剥奪を恐れる神々の王が、次代の王となりうる自分の子を害そうとするが、ゲーの助けにより息子は父王を追放し、世界支配の王権を継承する。では、継承神話の流れをゲーの夫ウーラノスの場合を例にとり詳しく分析する。

ウーラノス

一五四〜九行には、ゲーの怒りを買うことになるウーラノスの行った行為と、その理由が同時に示されている。

というのは大地と天から生まれた彼らは／全ての子供たちの中で、最も恐ろしく、その父親にはじめから憎まれていた。／ウーラノスは、彼ら(天・地)から誰か生まれるとすぐ／みなゲーの奥に隠してしまい、光(の世界)へは遣らなかつた。／ウーラノスのこの悪行にゲーは苦しみ

世界の最初の支配者ウーラノス(天)は、実子である巨人たちの力強さを不安に思ひ、⁽¹⁹⁾彼らによる篡奪を恐れて、再び母親ゲー(大地)の胎内深く、即ち地下世界に押し戻

してしまった。これにより母ゲーは呻き苦しみ、自ら子供たちに篡奪を呼びかけ、積極的に王位継承に動くこととなる。

その際、ゲーは中心的役割を果たし、篡奪はゲーの意志により始まり為されるのだといえる。母神は子供たちに向かって父の非道な所業の復讐を呼びかける（一六四〜六行）が、この要請に父を憎んでいた「ずる賢いクロノス *Kronos dykulojntis*」だけが、その不正行為を弾劾しながら答える（一七〇〜二行）。しかしこの次代の王となる彼でさえも「勇気を出して *degeia*（一六八行）」受諾するといった形をとり、ゲーに比べ受身であるといえる。

ここで興味深いのは、この二人のスピーチに「不当な所業 *deika epia*」（一六五、一七二行）という共通した語があることであり、これは生まれたはずの子供を再び母の胎内に戻してしまおうウーラノスの行動を指している。この *deika* は語の成り立ちから「あるべきではない、ふさわしくない、不自然な、正しくない」という意味を持ち、ここでは子供を生まれさせないという行為が「不当」であることをいう。換言すれば、子がこの地上に生まれ落ちるといふことがあるべき自然な状態であり、それはゲーの持つモ

イラ職能（機能、役目、権利）であって、ウーラノスの行為はゲーのモイラを著しく冒瀆したことになる。支配権の剥奪を怖れた王の行動が、万物を生むという世界にとって最重要のゲーのモイラに抵触し、その特権を持つ女神を、王位継承を促す行動に走らせた。ゲーにとって王位継承はこのような意味を持っていたのである。

一方、一五九〜六二行ではゲーの行動とその理由が同時に語られている。ゲーは自らの、あらゆるものを生むことができるというモイラを生かして、王位継承の策略を完遂するために必要な、クロノスの武器となる「鋭い歯のついた大鎌 *ikra deirou*（…）*epim kaphopodourai*」（一七三〜五行）及びその材料たる鋼鉄を創造した。そして、ウーラノスは待ち伏せしていたクロノスによって去勢され（一八〇〜二行）、後にその陰部は海に落ちて美神アプロディーテーとなり、またゲーはその血を浴びて復讐女神エリニエスを宿す⁽²⁵⁾。かくしてクロノスが王位を継承し、これ以降ウーラノスはガイアの生むモイラを阻害するどころか、世代交代を推進させるようになる。夫婦で子孫たちに忠告を与えているということは、「大地と星々輝く天の勸

め「[αἰνὸς φραδοῦσιναι καὶ Οὐρανῶν ἀστεροῦρος]」(四二六三、八九一行)という表現からも分るだろう。

このような継承神話の流れは、次代のクロノスにおいては同様であるが、後述するように現在もその支配が続いているとされる三代目のゼウスにおいては異なり、それについては特にゼウスとメーティスとの結婚において明らかになるだろう。

ゼウス

クロノスは、やはり篡奪者となり得る息子の誕生を恐れ、妻レアの生んだ子供たちを皆隠すが、ウーラノスが母ゲーの胎内に押し戻したのに対し、クロノスは自らの腹中に子供たちを呑み込んでしまう。これもやはりゲーの生むモイラにそぐわない不当な行為であり、ゲーは新王ゼウスを助け育成するという形で、篡奪者側に協力する。女神は夫クロノスの非道に悲しむ娘レアに、末子のゼウスに見立ててクロノスに石を吞ませ、子供たちを吐き出させるという計略を授ける(四七二〜三三行)。ゲーの多大な援助により無事成長したゼウスは他の兄弟たちを助けだし、父を倒し王位を継承する。彼の誕生からその育成まで、母レアの影は

薄く、むしろ祖母であるゲーが全面に活躍し、子を守り養う母神として描かれている。

このようにゼウスに対してゲーはウーラノスやクロノスに対するよりも好意的であり、ゼウスはゲーとうまく共存しているといえる。だからこそ、彼の覇権の確立で継承神話は完結しているのだし、また逆に『神統記』は正義の神ゼウスの支配体制、即ち「秩序」が成立するまでの物語であるという見方も可能だろう。ゼウスの神話はティターン神族との全面戦争(六一七〜七二〇行)²⁸、テュポエウスとの戦い(八二〇〜八六八行)、支配権確立(八八三〜八八五行)、メーティスとの結婚(八八六〜九〇〇行)というように展開されるが、テュポエウスとの戦い以外、ゲーはゼウスに対しては数度にわたり助言や予言による警告を行い、彼の治世の危機を救っている。まずティターン神族との戦いでは、ウーラノスによりタルタロスに追放された百腕たちを呼び戻し、味方に引き入れるよう神々をゲー「自ら…説得 αὐτῆν…κατέβη」しており、ゼウスに対してはゲーが積極的・能動的にその治世を守ろうとしたのだとも理解できる。

しかしゲーは、支配権を確立しつつあるゼウスへの挑戦者として、タルタロスと交わってテュポエウスを生み出す。この時ゼウスもウーラノスやクロノス同様に、ゲーと全面的に対立しており、これについてはゼウスの秩序原理とゲー側の混沌原理の対立と捉える説も見られる。⁽²⁹⁾この戦いがいわばゼウスの覇権確立の最終関門であり、これに勝ったゼウスはゲーに承認されモイラ（神の職能）・テイマイ（神の特権）の分配をし、ゼウスの支配体制はこの時確立され、同時に現在の世界の秩序体系も完成したといえる。よってゼウスと挑戦者テュポエウスとの戦いも継承神話の流れの一過程として捉えられる。

このようにしてゼウスはティターン神族やテュポエウスを降し、ようやく勝利の内に覇権を確立し、ヘーシオドスの文脈では継承の連鎖はゼウスの代で完了する。しかしその前提として、ゼウスはゲーの庇護のもと育ち、その覇業の成就もゲーから数々の忠告を授けられた結果であり、その永き治世もゲーが世代交代を企てるほどの行いがゼウスには見られなかったためだと了解できよう。

この時、不死なる神々は 王として統治するように催促

した／大地ゲーの勧めに従って、オリュンポスを見はらすゼウスに。／こうして 彼は 彼ら神々に 正しく特権を分け与えた。（八八四〜六行）

ゼウスはゲーに促され、かくして確立された自らの支配権により、神々のあるべき権利・役目・職域を定めた。このことはゼウスが自分の意思で、世界の構成要素たる神々を定めた所に配置する作業、つまり新たな世界を形作る作業であるともいえる。この新体制構築はゲーの承認の下に行われるのであるから、ここからもゲーの隠れた強大さが窺えるだろう。次のゼウスの結婚に際してもゲーは忠告を与え、クロノスの時と同様に大地が天とともに、息子による篡奪を警告するという形をとっている。

ゼウスとメーティスの結婚

メーティス⁽³⁰⁾は支配体制を打ち立てたゼウスの最初の妻となったが、ゼウスはゲーの予言・忠告により、メーティスの生む子による篡奪を知らされ（八九四行）、妊娠した妻ごと呑み込んでしまう（八八九〜九一行）。これにより、男神であるのにも拘らずゼウスは、自分の頭から戦略と勝

利の女神アテーナー⁽³³⁾を生み出す。もしメーティスがそのまま出産したとすれば、生まれてくるのは、娘アテーナーと篡奪者となるべき息子であった(八九七)。ゼウスはこの治世の危機をクロノス同様、ゲーによって知らされていたが、ウーラノスやクロノスとは異なった方法で回避に成功し、治世を守ることができた。

クロノス・ゼウスともに、ゲーとウーラノスが息子の篡奪を予言することは共通しており、また生まれくる子供たちを呑み込んでしまうということも類似している。しかし異なるのは呑み込む時点で、「生まれた片端から」(一五五、四六〇行)呑み込まれていくウーラノスやクロノスの子供たちが既に生まれていたのに対し、「前もって『Foodra』⁽³⁵⁾」呑み込むという方法を取ったゼウスの子供は未だ生まれ落ちていなかったという点である。クロノスやウーラノスが、確かに一度大地に生まれ落ちた子供を再び闇に戻し、光の下に出さないようにしたのに対し、ゼウスは前もって、母胎を子供ごと呑み込み、自らの男性である身体を用いるという特殊な方法を取ってはいるが、生まれるべき子をこの光の世界に正しく誕生させている。

子供の生まれたことそれ自体を拒絶するウーラノスやクロノスの行為は子殺しも同然の不当なもので、ゲーのモイラに反するが、ゼウスの出産は変則的であれ子供が生まれることを受容し、ゲーの生むというモイラに沿っている。またウーラノスやクロノスが誕生の事実ごと隠滅して、ゲーの司る旺盛な生産力や生むモイラを無効化しようとしたのに対し、男神であるゼウスの出産は、生むモイラの範圍内での行為であったと考察できる。換言すればゲーの生むモイラをゼウスが代行したとも解釈できるのではなからうか。

また篡奪回避のためとはいえ、子供だけではなく妻ごと呑みこむという特異な方法それ自体にも留意すべきである。善き事も悪しき事も この女神が彼に指し示してくれるように(九〇〇行)

とあるように、知恵の女神メーティスを呑み込むことで、ゼウスは直接的に彼女の知恵を吸収し自分のものとするのであるが、世界統治において失態を犯さぬよう、最も近い

ところ(自らの体内)に大変優れた助言者を置いたのだとも解釈できる。この後、メーティスは完全にゼウスの一部となり、彼女の持つ特徴はそのままゼウスを表すものとなった。例えば、「思慮深き *Intera*」はメーティスとともに後代ゼウスにも使われる表現であり、このことからゼウスとメーティスの分かちがたい一体性が窺える。⁽³⁶⁾

同時にゼウスはこの篡奪回避の方法で、他の性質の知恵、戦術や技術を司るアテーナーをも手に入れたことになる。

父親の頭からではあるが、この方法により実際に生まれたのは父に反逆する篡奪者ではなく、賢く従順な娘であり、母メーティスの知恵を応用した美用的戦術⁽³⁷⁾と、それによる勝利の女神をゼウスは得たと理解できる。傍らにニケー(勝利)を連れ常勝の戦女神を従わせたゼウスは揺らぐことのない勝利を手に入れたに等しいといえるのではないだろうか。

ただ、挑戦者テュポエウスやメーティスとの息子の例もあるように、先のウーラノス・クロノスのごとくゼウスも廃され新しい神々の王が立つ可能性も全く否定されていない。ゼウスの王権もまた磐石なものではなく、第二の

テュポエウス⁽³⁸⁾が現れ、転覆される危険を未だ内包している。支配権を勝ち得るまでのティターン神族との戦いやテュポエウスの挑戦、それを為した後もメーティスとの結婚など、数々のガイアの試練を克服してゼウスは王権を確立・保持している。ゼウスの王国は現代に至るまでゲーにより承認され続けているものだといえるだろう。ゼウスの確立した現行の秩序体制も、新たな生命を生み出し、世界を刷新しようとするガイアが促す継承の軛から自由ではない。

結

こうして、『神統記』はゼウスの支配、秩序体制が確立したところで終結を迎える。このことは他ならぬゲーがゼウスを支配者として認め、彼の王国を承認したことを意味する。それに対し、ゼウス以前の主神ウーラノス・クロノスは、支配権剥奪を恐れて子供の誕生という事実を自らを歪曲し、正しく生まれさせないということが、ゲーのモイラを冒瀆し篡奪を招いた。ゲーの新たなものを生み出すという極めて重要なモイラを巡って、継承神話は繰り広げられるといえる。

また、神々の王が世界の構成要素たる神々の役割(モイ

ラ)を定める(※先述の引用)ので、神々の王位継承・世交代代はそのまま世界変革・世界秩序の改変さらには新世界の創造をも意味し、ゲーは自分の子供・子孫たちの継承を操作することで世界そのものを刷新したといえる。このように、継承神話は支配神の交代に留まらず、世界の構造そのものが変化する、いわばパラダイムの転換をも意味する。このことから継承の際には次代の支配男神のみならず、エリニュエスやアプロディーテー、ホーライやアテーナーなど新たな概念をモイラとして持つ新しい存在が誕生することも容易に理解できるだろう。

創世の頃から万物を生み続けている母神ゲーはこの世界を形作り、その統治者を生みまた選択する。現在も継続しているゼウスの王権もゲーのモイラに反しては存在しえず、現行のゼウスの秩序体制の中でもゲーの強大な影響力は変わらず衰えることはない。ヘーシオドスは収穫の豊饒、豊作を願ってというだけで、大地の神ゲーを重要視したのではない。ゲーは万物の母であり、原初から何者よりも先んじて最も多くものを生み出し、またこのような生むという職権モイラを有しているからこそ、創造者としてこの世

界を自由にし、新たに作りかえる権利を持ったのではないだろうか。ゲーの強大さは生むというモイラを持った万物の母なる故のものであったといえる。

文中の行数は『神統記』の該当する行を指す。

『神統記』の引用(以下『神』は West, M. L., *Hesiod, Theogony*, Oxford University Press, 1966 (テクスト及びコメンタリーを含む; 以下 West と略記))のテクストに基く。

(一) ヘーシオドス『仕事と日』五六三行 (West, M. L., *Hesiod, Works & Days*, Oxford University Press, 1978) また『ホメーロス讃歌』第三〇番「万物の母なるゲー讃歌」(Homere, *HYMNES*, Texte Etablit Et Traduit Par J. Humbert, Societe D'Édition "Les Belles Lettres", 1967) の題名も *Εἰς τὴν Μητέρα Γαῖαν* となっている。また同様の意味として *γαῖα ποιητήρισα* (同三行) と「表現もある。

(二) 作者ヘーシオドスが彼自身、羊を飼っていると語っている(二三行)、『仕事と日』でユニークな農事暦を記した故に『神』でゲーを大きく扱っているとの指摘も可能であろう

が、それでは決してヘーシオドスのゲー重視は説明し尽せないだろう。このことをモイラという概念から述べようというのが本稿の眼目である。

(3) 久保正彰『ギリシヤ思想の素地』岩波新書一九七三年一二八頁では他に演出家との表現がある。古澤ゆう子『牧歌的エロース近代・古代の自然と神々』木魂社一九九七年一九七頁参照。黒幕とも表現されている。ガイアを表には出ずら裏から世界を操る存在とするこれらの表現は非常に説得的である。

(4) 「万物の母なるゲー讃歌」Homere. *HYMNES* (注1参照) 三三行参照。

(5) このことを私はモイラという概念を使って、「生むというモイラを持っている」と表現するが、それは本文第一節で詳しく述べる。運命などのモイラの類語や¹⁾ Greene, Chase, William, *MOIRA Fate, Good, and Evil in Greek Thought*, Harvard University Press, 1948 (以下Chaseと略記)のp.224に挙げられている *bira* や *votos* など古代ギリシアに特徴的で広意義を持つこれらの語は、分配の概念とともに今後取り上げて研究してみることがあると考える。

(6) モイラは神々を超越しているかという命題について、Chaseは、サルペドンの死を挙げて、ゼウスは意思決定に

迷うこともあるが、結局はモイラという掟に沿っており、しかもその決定は変えることはできない、とある(前掲書p.15)。ゼウスは息子サルペドンが戦死する運命にあると知りながらも、モイラに逆らって救うことはできず『イーリアス』一六卷四三九行)、アポロンは機知を働かせてモイライを騙し、漸く親友のテッサリア王アドメトスの死すべき運命を、代わりに妻が死ぬという条件付きで変更させることに成功した(エウリピデス『アルケースティス』一一行)。神々とモイラの関係は、注意深く考察すべき事項であるが、神々とモイラが対立する概念であるかどうかはモイラの「運命・摂理」としての抽象的性質、「運命女神」としての具体的性質を併せ持つ二重性に注目する必要があるため、Chaseの意見をそのまま受け入れられるとは限らない。

(7) 橋本隆夫「伝説のオイディプースとソポクレスのオイディプース」『オイディプースをめぐる悲劇作品と伝説—運命論の展開—』古澤ゆう子編 日本独文学界 日本独文学界研究叢書〇二二号二〇〇二年四四頁参照。橋本氏の考える「人生バタン」は、プラトンの『国家』六一八行で語られる *ta tan piron topodei yuata* を想定していると考えられる。橋本氏の必然に対する人間の自由意志のスタンスは、プラトンの運命観からも肯けるものである。

(8) ヘーシオドスのディケー観については「仕事と日」二一三〜八五行に詳しい。安部素子『正義』とパンドーラー―ヘーシオドス「仕事と日々」と女性嫌悪―古代地中海世界における「女性」の役割と意義』文部省科学研究費補助金研究成果報告書一九九二年の八〜一〇頁、及び廣川洋一『ヘシオドス研究序説―ギリシア思想の生誕』未来社一九七五年第五章参照。両者ともにディケーを「あるべき時・量」として、「時宜を得た *epatos*」と同義に扱っており、この考え方は本稿のモイラ観に通ずるものである。運命をはじめ、万物が神々や人間に分配されると考えるならば、ディケーやモイラはその分配の仕方や法則をも表していると考えられる。

(9) 安部(前掲書)一〇頁及び山形直子「ヘシオドス―農民詩人の世界観」川島重成・高田康成編『ムーサよ、語れ―古代ギリシア文学への招待』三陸書房 二〇〇三年所収七六頁参照。阿部氏の、「ディケーはゼウスの御心を読み取るところにしか存在しない」という観点は非常に説得的であり、さらにそこに大地母神パンドーラーを対置させるという議論は逆説的であるが故に二唆後に富む。

(10) Cf. Lamberton, Robert, *Hesiod*, Yale University Press, 1988 pp.72〜76

(11) 『神』一一八行。他に一二六行にも同様の表現がある

が、これはやはり大地の子である天ウーラノスを指す。West p.198参照。この箇所は神々の住居オリュンポスが大地にあるか天にあるかという議論と関わる。しかし、天をも大地の息子でありその延長と捉えるならば、ガイアは大地に留まらず世界全体となり、ガイアは天地を包含した宇宙であるという考えが可能となる。よってオリュンポスも人間の世界も等しくガイアの内にあるということになるのではなからうか。

(12) 『神』四九八、六二〇、七八七では *Xoivos epinothēns* との表現があり、同様の意味を示す。また、*epinothēns* と名詞化され大地それ自体を指すこともある。

(13) *Xoivos* West p.192参照。このカオスについては後代「混沌」「無秩序」などの意味を持つようになるが、「大きく口を開ける」という動詞 *खा* から成り、もとは空虚、巨大な空隙、何も無いぼっかり穴の開いた空間のことを言う。秩序 *kosmos* の反対語とされ、*chaos* として混沌の意味に使ったのは、オウィディウスが最初であるといわれている(『変身物語』の一卷七行、二卷一九九行、一〇卷三〇行、一四卷四〇四行参照)。Solmsen Friedrich, *Hesiod and Aeschylus*, Cornell University Press, 1949 (以下 Solmsen へ略記) p.27 でも指摘されているように、ゲーはカオスの次に生まれたとされるが、このカオスがゲーの

親かどうかは、『神』にも明確には書かれておらず、未だ多くの議論が交わされている。

(14) カオスが生む描写は『神』一三三行の一回のみで、後には場所としてしか語られていない。

(15) ゲーという名前自体、印欧語系の「生む者」という意味である。Der Neue Pauly Enzyklopädie der Antike「GAIA」の項 733/4 参照。

(16) 『神』一三三行他「欲望をそそる愛もなしに」ἀρετή φιλότητος ἐπιπέουτο αἶνεο。

(17) γένος にしうては West p. 215 に詳しい。動詞の「γεννάω 生む、γεννάωμαι 生成する」と同根である。一般的には血族や世代、出自、ルーツなどを言うが、ここではより原義に近い「生成されたもの」の意である。後述するようにゲーは王を襲撃する武器のみならず、ゼウスへの対抗者・篡奪者として怪物テュポエウスを生みだした。

(18) West p. 199 参照。このモチーフは「聖婚」として多くの神話・伝承に見られる。

(19) 『神』一五五行によると、父ウーラノスは子供である巨人たちを「はじめから ἐξ ἀρχῆς」憎んでいた。ウーラノスの巨人たちへの憎悪は「さて彼らの父(ウーラノス)がはじめ 心中 プリアレオス コットス そして ギュゲスを憎んでいたので、彼らを強い縛めで縛った。彼らの

力強さや容貌、巨大さを妬んだのだ」六一七〜九行にも同様に語られていることから明らかである。

(20) 『神』一五九行及び West p. 214 によれば、天は子供たちを再び大地の胎内奥深くに押し込み、ゲーを苦しめた。この際の悪行にふけるウーラノスの快感と腹に詰め込まれたゲーの苦痛の対比が印象的であると述べられている。

(21) ウーラノスの憎む対象が、その強大な力を恐れた巨人たちであるのに対し、クロノスは明確にウーラノスを憎んでいる。この憎しみに関して West などは、子クロノスから親ウーラノスへの憎しみを、エヌマエリシュと比較して論じている (p. 213)。West が比較の対象として挙げているこのバビロニア神話には、たとえば母親ティアマトが増えすぎた子供に対して、騒がしいと夫に苦情を言う場面があり、たしかにこれは親から子への憎しみであるといえるだろう。しかし West が例示したような、創造神が人類などの増えすぎた子供を騒がしいとし、これを滅ぼそうとするというモチーフは中東地域をはじめ北欧など多くの地域で見られる洪水神話の文脈で語られることが多く、『神』の継承神話における父子間の対立と直ちに結びつけられるものではないように思われる。むしろギリシア神話に見るならば、トロイア戦争の発端となったガイアの訴えとゼウスの Ποινη に近いだろう。

(22) 『神』一三七、一六八、四七三、四九五五行など参照。

クロノスのエピテトンであり彼の怖ろしさ、陰気さがよく表れている。ここでは他にも *μειγος* というエピテトンがついているが、この形は他にウーラノスやゼウスにも使われているので、クロノスのエピテトンとしては *ἐπιθετικῆς* の方がより特徴を表している。

(23) 「否定辞 $\alpha + \epsilon\iota\kappa\acute{\alpha}$ (*eiké' eikao*) 適切ではない」

(24) Banks, M.A., *The Works of Hesiod Calimachus and Theognis*, G. bell and sons LTD, 1914 (以下 Banks と略記) p.11によると、その刃は鋸のようなやや特殊な形状をしており、後にクロノスの特徴付ける持物となるといえる。しかしクロノスの持物が農具であるからといって、彼が農耕の神としての側面を持つと結論付けるのはあまりにも性急な判断であろう。この鎌は実りを刈り入れる農具としてよりも、厳格な時間の神として生きている者の命を断ち切る武具であるといえる。

(25) この文脈でオレステス神話などの悲劇で親族殺しの折に登場するエリニュエスの起源が示されていることは大変示唆的である。

(26) 『神』四六三、四六四行。クロノス以降については、ゲーは予言も持っている。クロノスもゼウスも自分の地位が息子によって奪われる可能性をゲーによって予め知ら

されていた。

(27) 『神』を混沌(ゲーやカオス、タルタロスなどの原初存在)からのゼウスの法体制、秩序確立の過程と見做す観点は、Chase pp.29~31(安部(前掲書)、山形(前掲論文))など多くの学者が指摘している。

(28) Solmsen pp.17, 148 などには、ティターン神族との戦いは、ゼウスの力を示す場であったとある。父クロノスのティターン神族を追放することで、支配神族はゼウスのオリュンポス神族に移行する。この戦いは継承神話の世界支配権を巡る戦いの中でも最も顕著なものであったといえる。

(29) Gantz, Timothy, *Early Greek Myth: A Guide to Literary and Artistic Sources*, Johns Hopkins Univ. Press, 1996 pp.48~51 など。なお、Solmsen はアイスキュロス作『縛られたプロメテウス』においてプロメテウスがゼウスへ挑戦することを、彼がガイアの最後の息子であるからとし(p.131など)、ゼウスとガイアの原理的対立の観点を失わずに巧みに解釈している。この説は非常に説得的であり、このプロメテウスに第二のテュポエウスを見ることが出来るだろう(注38参照)。

(30) *Metis prudentia* 思慮深きメーティス。メーティスは海神オケアノスの娘で海の妖精であるともいわれ、後世のアポロドーロスなどによると、メーティスは実用的な知恵

を司るといわれている (Banks p.43)。このような水神と智恵の関係については吉田敦彦『水の神話』青土社一九九一年一八一頁に詳しい。吉田氏は弁財天(サラスバティ)を挙げているが、女神に限らなければ他にも北欧の知恵の巨人ミールやバビロニアの知恵の神エアも挙げられるだろう。

(31) West pp.20 など参照。この神話比較はデュメジル (*l'idéologie tripartite des Indo-Européens*, 1958 など) をはじめ、多くの研究者の指摘するところである。男神が産するエピソードは他にヒッタイトのクマルビ神話に見られる。主神アヌと篡奪者クマルビが戦っている際、クマルビがアヌの陰部に嘔み付き、妊娠し、神々を脅かす石の怪物ウルリクンミを生み、これは支配神に対抗する怪物として、よくゼウスへの挑戦者テュポエウスと比される。

(32) Westによると、アテーナーのゼウスの頭からの誕生は、ペガサスとクリュサオルのメドゥーサの首からの誕生とパラレルな関係であると言う。これについては Vernant, Jean-Pierre, *La mort dans les yeux*, in *Texts du 20esiècles*, Hachette, 1986 pp.68-9 に大地母神と馬との関係性に続けて言及があるが、アテーナーとペガサスは直ちに結び付けられるものではなく、未だ異論の余地があるように思われる。

(33) Homère, *HYMNES* (注1参照)。讃歌第一番「アテーナー讃歌」二、三行：女神が関心を持つのは戦いの技術や市を攻め滅ぼすこと、叫びと戦闘。

(34) クロノス：『神』四六三、四六四行。ゼウス：『神』八九〇、八九一行。これらの部分は同じような文型で好対照を狙っている。

(35) 「しかしそこでゼウスは前もって彼女(メーティス)を彼の腹の中に押し込んだ。」(八九九行)

(36) 神話学ではゼウスは婚姻によって地方の女大神の力を取り込んでいったという解釈もあり、ゼウスの婚姻関係を三人の妻女神のモイラから探るという方法は今後の課題としたい。

(37) メーティスはどちらかというと、観念的ではなく実用的な知恵を体現する女神であり、このことはその娘アテーナーの職能モイラからも肯けるだろう。アテーナーは戦争における知恵、即ち戦略・戦術のほかに、織物などの技芸・技術を司る。これらは皆、母メーティス譲りの実用的な知恵であるといえる。

(38) Solmsen に依拠するならば、テュポエウス、メーティスの息子に続くゼウスの支配への挑戦者はプロメーテウスという解釈も成立するだろう。テュポエウスが武力による抵抗をしたのに対し、プロメーテウスは知恵によって

ゼウスを試したともいえる。このように主神の支配は絶えず挑戦を受け、ガイアによって繰り返し試されているといえるだろう。神の統治は磐石ではなく、また世界は不変不動のものではない。現行の世界は生むモイラをもつ万物の母ガイアによって常に変化を促されているといえる。

二〇〇五年一月一日受稿

二〇〇五年一月二十八日レフェリーの審査をへて掲載決定

(一橋大学大学院博士課程)